

2023. 10. 20

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 41

目次

1) 支部長挨拶

巻頭言

新しいスタートに際して

(西南学院大学 清宮徹)

2) 第30回九州支部大会案内

第30回九州支部大会「現代社会における分断とコミュニケーション」

(愛知東邦大学 吉村美路)

3) 今年度の支部活動

『九州コミュニケーション研究』第21号の報告

(福岡教育大学 吉武正樹)

4) 会員からのメッセージ

コミュニケーション教育への興味—モヤモヤを問いに変えて

(立教大学大学院 川野優希)

コンフリクト研究との出会い—自身の歩みと葛藤の中で

(西南学院大学大学院 郭仁敬)

5) 会員の出版図書紹介

福岡女学院大学 池田理知子

◆池田理知子 (編) (非売品)

『MCD スタディーズ——福岡+みつめる』

6) 編集後記

1) 支部長挨拶

巻頭言

新しいスタートに際して

支部長：清宮 徹（西南学院大学）

2023年度からJCA九州支部の支部長を務めております清宮徹と申します。今号の巻頭言は、恐縮ですが、良い機会なので私の自己紹介を中心にしてお伝え致します。JCA との関わりは 2012年の JCA 年次大会で、私が勤める西南学院大学において大会担当理事と実行委員長を務めたときからです。長いこと JCA 理事会に関わり、大会担当理事のほか事務局長も務めましたので、すでに私の名前をご存じの方もいらっしゃるかもしれません。今後も九州支部の会員のみなさまと積極的にコミュニケーションをとりながら、支部会の活性化に献身したいと思います。

私自身は浦和(現、さいたま市)に生まれ育ちましたが、2001年10月に着任以来20年以上福岡で生活しておりますので、最近では博多弁も少々板についてきたような気がします。東京の大学を卒業後31歳まで、日本生産性本部という経済団体に産業教育や人事評価のコンサルティングの仕事が続けましたが、職務を通じて日本の人事や経営について見ているうちに、とても強い違和感を持つようになりました。日本の産業組織の変革のためにもっと勉強したいという気持ちが強くなり、最終的には仕事を辞めてアメリカ留学を敢行しました。組織は応援してくれましたが、家族の猛反対にあいながら、退職金を元手に31歳で大学院留学した次第です。

前職を活かすつもりで、ミシガン州立大学の Labor and Industrial Relations という専門職大学院で人的資源管理と組織研究を中心に学び、

修士号 Labor Relations & Human Resources を取得。その後方向転換を試み、ミシガン州立大学のコミュニケーション学において博士号を取りました。組織コミュニケーション論やグループコミュニケーションが私の専門になります。この研究領域はアメリカではとても大きな研究グループを形成していますが、経営学の組織行動論や産業組織心理学と重なり、日本では組織コミュニケーション論の専門家はあまり多くいません。コミュニケーション学全般に言えることですが、近接領域との切磋琢磨が求められる研究領域です。

西南学院大学に着任する前は、オクラホマ州のタルサ大学やテキサス大学サンアントニオ校で教えていたので、福岡へはテキサスからの引越しとなりました。着任から22年間、いろいろな方々との出会いや他領域からの学びによって、私の研究も大きく発展・変化したと思います。最も大きな変化は研究方法です。ミシガン州立大学ではネットワーク分析を含めた統計学中心の定量的な研究をしていましたが、2006年のイギリスでの在外研究中にディスコース分析を学び、今は人々の語りや組織が発信する情報やメッセージを批判的にディスコース分析する質的研究を行っています(清宮, 2019)。

私の主な研究は、大きく3つのテーマに関連しています。第一は組織の不祥事研究です。2001年に日本に帰国したとき、日本の産業界は度重なる不祥事が深刻な問題となっていました。必然的に私の研究も、不祥事の批判的研

究に向かいました。経営学では一般的に、企業倫理やガバナンスの問題として研究されましたが、私はポスト構造主義的な視座から組織のコミュニケーションを批判的に研究しました。不祥事は企業の偶発的な誤りや倫理観の欠如ではなく、資本主義組織においてなるべくしてなった必然的な帰結であり、どんな組織でも起こりうる可能性があるものと考えます(清宮, 2013)。

第二は、東日本大震災に関連する研究、特に復興の語りのディスコース分析です。研究の出発点は、日本社会の価値観を根底から揺るがすような地震と津波の被害、その危機対応と復興の過程から何かを学ぼうとする姿勢でした。2013年からコロナ期を除いて定期的なフィールドワークを重ね、被災地でがんばるコミュニティ・リーダーにインタビューを重ねて、この語りをディスコース分析してきました(清宮, 2023)。今年度は、復興から懸命に立ち上がった旅館の女将たちに、宿と地域の再生に向けた12年間の努力の過程を取材しました。コミュニティ・リーダーに話を聞いていると、いつの間にか男性からの話ばかりになっていたのも、女性の視点という意味で、被災地の復興に尽力している旅館の女将たちに話を聞く機会を得た次第です。この研究プロジェクトはもう一つの研究プロジェクトにも関わり、女性のコミュニティ・リーダーとエンパワーメントを探求するものです。

最後に、もう一つの最近の研究領域ですが、それは組織におけるジェンダーやマイノリティにかかわる研究です。日本のジェンダーギャップ指数が低いことに代表されるように、日本組織のジェンダー問題への取り組みは世界中から大きな注目を受けています。組織ジェンダーへの問題解決は、日本の組織と産業界を健全化していく要と言えるでしょう。私は、女性雇用や男女の機会均等の側面ではなく、性差がど

のようなコミュニケーション過程(つまりgendering)から生成し構造化しているかに着目しています。男女の差異を前提として始めるのではなく、私たちの日常のコミュニケーションや当たり前化した言説が作り出す差別構造を考察しようと試みています(中村・清宮, 2022)。さらに、ジェンダー研究がアメリカ中産階級の女性中心であるという批判(ブラックフェミニズム)にはじまる、ジェンダーとその他の社会関係が交わる交差性(intersectionality)についても研究を発展させたいと考えています。

このように多面的な研究を行っていますが、研究者はある種のプロデューサーであり、学術的なマーケティングの従事者とも考えます。研究トピックは自然発生的に生まれるものではなく、時代背景や文化などのコンテキストの中で偶然と必然から生み出されると思っています。私個人としては、組織がよりデモクラティックなコミュニケーションを生成し、企業活動を通じて社会が平和になる道筋を模索していきたいと願っております。

九州支部会はJCAの中でも特に支部活動が活発な伝統を持っています。支部長としてとてもやりがいを感じ、同時に大きな責任を感じます。この巻頭言が会員の皆様との議論や対話のきっかけとなり、支部会や年次大会、またジャーナルなどを通じて、より活発な学会活動に結び付くことを願います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

<参考>

清宮徹 (2013). 「組織不祥事の倫理的視座と批判的視座」日本コミュニケーション研究者会議『*Proceedings 22*』

清宮徹 (2019). 『組織のディスコースとコミュニケーション: 組織と経営の新しいアジェンダを求めて』 同文館出版

中村暁子・清宮徹 (2022). 「ジェンダーと組織研究: フェミニスト組織理論によるフレーム

化」組織学会編『組織論レビューⅢ』p.81-114.
白桃書房

清宮徹 (2023). 「震災復興のディスコース
分析:アイデンティティの言説的構成とレジリ
エンス」『組織科学』第56巻3号 p.63-78.

2) 第30回九州支部大会案内

第20回九州支部大会【祝！30周年！！】

大会テーマ：「現代社会における分断とコミュニケーション」

2023年11月25日（土）

西南学院大学コミュニティーセンター1F及び2F

対面 & オンライン（ハイブリッド）

吉村 美路（愛知東邦大学）

2023年11月25日（土）日本コミュニケーション学会九州支部第30回大会を開催いたします。今年度は九州支部設立30周年の記念年となります。ベテラン研究者の方から若手研究者の方まで、未来に繋がる有意義な研究活動の場となることを運営委員一同、心より願っております。

さて、記念年の支部大会は、新型コロナウイルスも落ち着きを見せたことから、対面とオンラインによるハイブリッドで開催することにいたしました。今年度の基調講演は、先般翻訳発表された『差別と資本主義：レイシズム・キャンセルカルチャー・ジェンダー不平等』の翻訳者のお二人、眞下弘子先生（西南学院大学外国語学部教授）と伊東未来（西南学院大学国際文化学部准教授）にご講演いただきます。大会テーマである「現代社会における分断とコミュニケーション」を軸に、世界各地で現象化し議論されている差別、格差、正義、文化、ジェ

ンダー、不平等、アイデンティティ、植民地主義など、多面的に議論して参ります。

参加申し込みは、[Google フォーム](https://docs.google.com/forms/d/1v9af2iHBEfHgN3F-myLjYpCW_IqD2RxNzjsV-otwZA8/edit?pli=1&pli=1)
（https://docs.google.com/forms/d/1v9af2iHBEfHgN3F-myLjYpCW_IqD2RxNzjsV-otwZA8/edit?pli=1&pli=1 11月20日締め切り）にて受付中です。

また、九州支部30周年記念プロジェクトも計画中です。これからのコミュニケーション研究を推進する若手の先生方に企画を考えていただくイベントにできればと考えております。詳細につきましては改めてお知らせいたします。若手研究者の皆様、ぜひご検討ください！それでは、支部大会当日は皆様にお会いできますことを、運営委員一同、楽しみにしております。

九州支部運営委員一同

3) 今年度の支部活動

『九州コミュニケーション研究』第21号の報告

紀要担当運営委員：吉武 正樹（福岡教育大学）

平素よりお世話になっております。4年にわたる支部長の務めを終え（毎回長々とした「巻頭言」にお付き合いいただき感謝です…）、今年度より紀要を担当することになりました吉武です。以前よく口にしていたように、支部大会と支部紀要は支部の「お祭り」「神輿」です。さらに九州支部を盛り上げていけるよう、精進いたします。

2023年10月末日に『九州コミュニケーション研究』第21号を刊行する予定です。本来ならば9月末刊行のところ、遅れて申し訳ございません。

第21号へも多くのご応募をいただき、ありがとうございます。査読の結果、以下の3本の研究論文を掲載する予定です。

- ・ 川野優希（立教大学大学院生）「聴き手の役割を重視したスピーチ・プレゼンテーション教育の実践研究—フィードバックに焦点をあてて—」
- ・ 上土井宏太（鹿児島大学）、竹中野歩（データストラテジー株式会社）、中川詩奈（九州大学）、井上奈良彦（九州大学）「音声変換技術を用いたインクルーシブディベートの実現可能性に関する研究」
- ・ 友池梨紗（愛知淑徳大学）「恋愛における『自律的出会い』に焦点を当てた探索的調

査—恋活・婚活に利用されるツールとコミュニケーションの関係—」

見てのとおり、多様なテーマとなっています。ぜひご一読ください。

研究論文3本の他、「特別企画」として2022年度支部大会（Zoom）にてライターの堀内都喜子先生にいただいた基調講演「フィンランド—幸福度ランキング1位の背景にあるもの」を収録しています。身近な話題から社会問題まで広く言及した、大会テーマ「幸せとコミュニケーション」にふさわしい論考です。特に支部大会に参加できなかった皆様には、お読みになっていただきたい一本です。

支部紀要『九州コミュニケーション研究』は日本コミュニケーション学会九州支部のホームページに掲載されています。支部紀要では、「研究論文」「研究発表論文」「研究ノート」を広く募集しております。ぜひご覧いただき、次号への投稿をご検討ください。第22号のめ切は例年通り、1月末日の予定です。特に11月25日に開催される第30回九州支部大会でご発表される先生方は、前向きにご検討いただけますと幸いです。「神輿」の担ぎ手である皆様の「お祭り」へご参加を心よりお待ちしております。

4) 会員からのメッセージ

① コミュニケーション教育への興味—モヤモヤを問いに変えて

川野 優希 (立教大学大学院)

はじめまして。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科に所属しております、川野優希と申します。現在は後期課程の1年生として、師岡淳也先生ご指導のもと研究に励んでいます。

お会いしたことがない方がほとんどだと思いますので、自己紹介も兼ねて私の経歴を少しお話しさせていただきます。出身は大分県で、学部生としてAPUを卒業するまでは基本的にほとんどの時間を大分で過ごしました。卒業後、民間企業へ就職し、愛媛県で3年ほど法人営業を担当しましたが、やっぱり海外に行きたいなあという募る想いを捨てられず、JICAの青年海外協力隊の一員としてルワンダ共和国へ行きました。ルワンダでは、水・衛生分野を担当し、井戸(ハンドポンプ)の維持管理の指導や手洗い指導などの活動に従事しました。ルワンダで3年が経とうとする頃、熱いお湯の入った湯船が頭を離れず、そろそろ地元に戻りたいなあと感じたことから大分県内の専門学校に就職し、留学生担当としておもに日本語教育に携わりました。そんな中で(?)徐々にコミュニケーション教育への興味が強くなり始めたことから退職を決意し、立教大学大学院の修士課程に入学、そして今に至ります。

改めて振り返ってみると、我ながらなんて思いつきで一貫性のない人生だろうか、と感じますが、コミュニケーション教育に興味を持ったキッカケをたどってみると、学部生のときまで遡ります。ある日、米国の留学生に「なんで日本人は自分の意見を言わないの?」とひよんな問いかけをされました。このヒトコトが学部を

卒業してからの10年弱、なんだかずっと心に引っかかっている、さまざまな場面で思い起こされてはまた忘れる、を繰り返す中で、もうこのモヤモヤを放っておけない!となったのが、修士課程入学を決めた2年半前でした。

現在はコミュニケーション教育、とくにスピーチ教育(スピーチ・プレゼンテーション・ディベート)に興味を持って研究をしています。とりわけ、日本の高等教育機関におけるスピーチ教育の現状の課題や可能性を明らかにすること、聴き手の役割や育成に焦点を当てた教育実践をおこなっていくことの2つを中心としています。

それもこれも「なんで日本人は自分の意見を言わないの?」の問いかけに答えるため、(自分の意見を言う状況と言え、人前で話すときだよ、じゃあスピーチ教育!)と、よく分からない論理と実に単純な思考回路で研究テーマを決め、研究を進めていく中で、(ちょっと待てよ、そもそも相手の話を聴いてなかったら自分の意見なんて言えないじゃん、ってことは大事なのは聴き手の聴き方だよ?)と、これまたよく分からない飛躍した考えと変わらない単純な思考回路で、聴くことの教育にも興味を持ったという流れです。

振り返ってみると、なんて思いつきで信念に欠ける研究生生活の始まりだろうか、と感じますが、真摯に向き合ってくくださる師岡先生を始め、いつもさまざまな視点からアドバイスをくださる日本コミュニケーション学会の会員のみなさまのおかげで多くを学び、深めながら、楽しく研究を進めることができています。

最初の自己紹介でも触れましたが、私は人生のほとんどの時間をこの九州で過ごしておりますので、九州（とりわけ大分県）に対する愛は割と強いと自負しております。この度、九州支部会員の一員になれたことを非常に嬉しく思っておりますし、まだお会いできていない

先生方と今後お話をするのをとても楽しみにしています。

どうぞ学会等でお会いになった際には、よろしくお願いいたします。

4) 会員からのメッセージ

②コンフリクト研究との出会いー自身の歩みと葛藤の中で

郭 仁敬（西南学院大学大学院）

はじめまして。西南学院大学大学院文学研究科博士前期課程2年の郭仁敬と申します。宮原哲先生のご指導の下、若者の友人関係におけるコンフリクト行動とコンフリクトに対する意味付けをテーマに研究をしています。

「コンフリクト」や「若者の友人関係」を研究テーマにした最初のきっかけは、私の生い立ちや経験にあります。私は韓国で生まれて8歳の頃に家族と共に日本に移住し、11歳の頃に1年だけアメリカに移り、再度日本に帰ってきました。多様な経験を通して人生を豊かにしてくれた両親には大変感謝していますが、幼少期にこれだけの移住経験を持つと、苦労があったのも事実です。日本語や英語が分からず人と思い通りに話せないのはもちろん、ある程度話せるようになってからも文化（コミュニケーションの仕方や価値観、マナーなど）の違いに悩まされました。正確に言うと、当時は自分が悩んでいた理由の一つに「文化」があるとは考えなかったのですが、後から考えると、大きく関係していたのだらうと思います。なかなか本当の意味で日本社会の一員になったように思えず、周りの目を気にして心を開けない自分をあまり好きになれませんでした。

さらに、高校生のときには病気や足に障がいを負うという経験をするようになります。そう

する中で、「日本人のような韓国人」や「一目見ては分からない障がい者」としての自分を上手く受け止めきれず、内的葛藤を抱えながら人と接するようになりました。人と付き合うことが好きである一方で、「自分は人とのような関係を築きたいのか」、「自分をどのように見せたいのか」という疑問に対する答えが見つからず、新しい人間関係を築くことに消極的になってしまったのです。また、相手の感情や考えを気にするあまり、自分の意見を主張できない傾向が強くなりました。

このような悩みを抱えた上で大学に進学し、出会ったのが「コミュニケーション学」でした。一般的には、友人や家族、恋人などの人間関係におけるコミュニケーションを考える際、特定の関係性を前提とし、その関係があるからコミュニケーションをすると考える場合が多いのではないかと思います。しかし、コミュニケーションこそがそのような関係を築き上げているとも考えられるのです。コミュニケーションを通して、人と「友人」や「恋人」になることに加え、たとえ同じ「友人」カテゴリーに含まれる人々であっても、それぞれの過去によって、その関係性は全く異なります。この考え方に感銘を受け、私はそれまでの悩みに対する解決の糸口を発見できたように感じました。当た

り前のことかもしれませんが、相手任せにするのではなく、まずは自分が相手と望む関係を作れるように努力することが大切だと気付いたのです。

さらに、中でもコンフリクト研究や日本のコミュニケーションの研究の存在を知ったとき、自分が深めたい学問はこれだと強く思いました。日本人は「空気」や「察し」を重要視し、対立・衝突を回避する傾向にあるとされています。一方、欧米の研究では、コンフリクトを対処する上で「回避」は非効果的で否定的なものとして捉えられる傾向にあります。しかし、コンフリクトになりそうな状況を察し、水面下で解決を試みる能力は決して簡単に身に付けられるものではありません。また、そのような行動の背景として指摘されることが多い文化的要因の一つが日本の「集団主義」的傾向であり、「日本人は集団主義的だ」という言説は通説のような存在となっています。確かに、人間関係の維持や調和を大切にすると、「他者」や「集団」を重視する側面は通説で説明できますが、その言動を行う人々の背景はもっと複雑で、通説はその表層しか捉えられていない可能性があります。したがって、個人主義・集団主義という文化普遍的な物差しで日本人のコミュニケーションを捉えるには限界があり、文化固有の枠組みから人々のコミュニケーションを理解する必要があると考えています。

そこで現在は、「希薄化」もしくは「選択化」が進んでいるとの知見が出されている日本の若者の友人関係に焦点を当て、彼らのコンフリクト行動とその背景、そして彼らがコンフリクトという状況に対して持つ意味を研究しています。希薄化とは、お互いを傷つけない表面的で円滑な関係を指向する傾向を指し、選択化は、状況や関係に応じて異なる振る舞いをする傾向を示す概念です。彼らの表面的な行動だけでなく、その理由や状況に対する意味付けを調べることで、言動の背景を既存の枠組みにとらわれず、より深く理解できる可能性を追求しています。

まだまだ研究は発展途上で苦悩しながらも、研究を通して、若者のコミュニケーションやその背景を詳細に明らかにできる楽しみを感じています。また同時に、類似した悩みを持つ人は自分だけではないことを知ることでもできています。この研究が、コンフリクト研究や日本的コミュニケーションの研究、友人研究などに学問的に寄与できるだけでなく、人間関係やコミュニケーションに不安や悩みを抱える多くの若者にとっての希望や解決のヒントになれば光栄です。

今後学会等で会員の皆様と直接お会いできることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

5) 会員の出版図書紹介

◆ 『MCD スタディーズ——福岡+みつめる』 (池田理知子編、非売品)

池田 理知子 (福岡女学院大学)



福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科で授業を担当している教員の研究成果の一端を学生や地域の人たちに知ってもらうために、この本は作られました。本のタイトルであるMCDは、本学科のカリキュラム・三領域を表しています。Mはメディア(media)、Cはコミュニケーション(communication)、Dはデザイン(design)です。以下、目次を載せておきます。

第一章 カネミ油症事件が伝えるもの～食品公害から私たちの生活を考える～

第二章 天神ジェンダーマップの制作～埋め込まれた社会的規範を可視化する～

第三章 ローカルメディアが果たす役割と可能性～日常のストーリーを語り、地域をつなぐ～

第四章 「振武寮」があった時代を生きた福岡女学校生～戦時下の「記憶」を語り継ぐ～

第1章の一部と第4章を私も書いております。興味のある方は、残部があればお分けすることもできますのでご連絡ください。

この本に関する学科[ブログ記事](https://www.fukujo.ac.jp/university/today/archives/5519)(大学HP内)
(<https://www.fukujo.ac.jp/university/today/archives/5519>)です。

6) 編集後記 丸山 真純 (長崎大学)

私のNL担当は二期目に入りました。懲りずに、またよろしく申し上げます。在学研究からの帰国後のバタバタは終わったものの、4月より所属学部の国際交流委員長を担うこととなり、慣れない仕事に追われ、今号も発行時期が遅くなってしまいました。なんとか、支部大会案内を支部大会前に発行して、少しでも支部大会の盛り上がりには貢献できればと思っています。今回の大会は30回大会ということでもあり、久しぶりの対面での開催にもなります。みなさんと対面そしてオンラインでお会いできることを楽しみにしています。最後に、前号でも書きましたが、支部活動の発信の貴重な媒体であるNLを通して、皆さんの活動・活躍を掲載できればと思いますので、情報をお寄せいただければとも思います。また、NL企画へのアイデアなども募集しています。よろしく申し上げます。

発 行 元 :

日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒465-8515 名古屋市名東区平和が丘三丁目11番地 A 棟 4 階

愛知東邦大学経営学部地域ビジネス学科 吉村美路

電話: TEL(052)782-1241(代表) メール: kyushu_office@ml.jca1971.com

URL: <http://kyushu.jca1971.com/>
